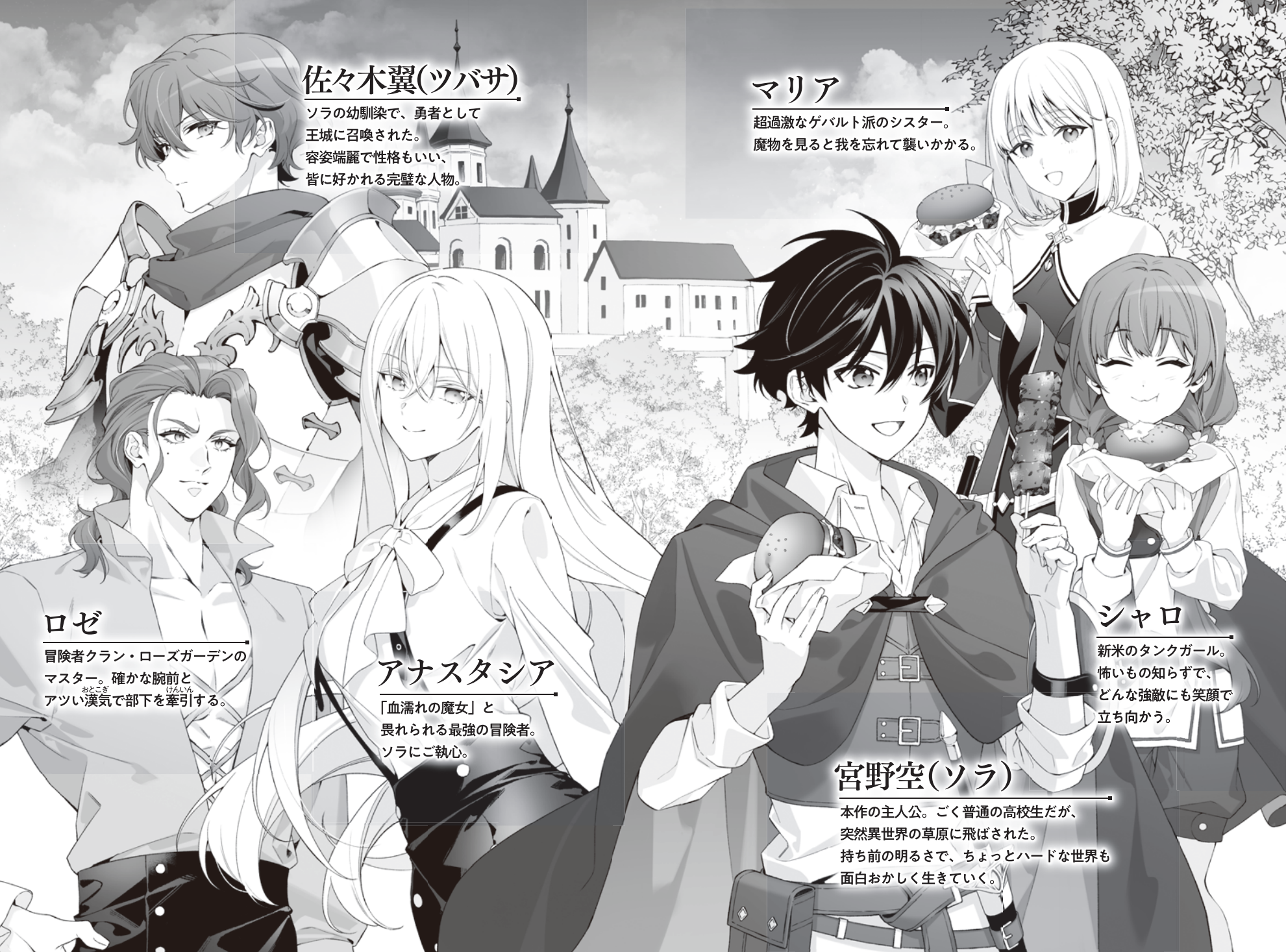
異世界転移は草原スタート!?2

著 ノエ丸
ill. まろ

勇者はお城でVIP待遇、俺は草原でサバイバル


佐々木翼(ツバサ)
ソラの幼馴染で、勇者として
王城に召喚された。
容姿端麗で性格もいい、
皆に好かれる完璧な人物。
マリア
超過激なゲバルト派のシスター。
魔物を見ると我を忘れて襲いかかる。
ロゼ
冒険者クラン・ローズガーデンの
マスター。確かな腕前と
アツい漢気で部下を牽引する。
アナスタシア
「血濡れの魔女」と
畏れられる最強の冒険者。
ソラにご執心。
シャロ
新米のタンクガール。
怖いもの知らずで、
どんな強敵にも笑顔で
立ち向かう。
宮野空(ソラ)
本作の主人公。ごく普通の高校生だが、
突然異世界の草原に飛ばされた。
持ち前の明るさで、ちょっとハードな世界も
面白おかしく生きていく。

1. 新たな出会い

カーン。カーン。

ツルハシのぶつかる金属音が坑道に反響する中、何人もの人間がツルハシを振るい、鉱石を掘っていた。

ここはとある鉱山都市。

坑道を抜けた先にある採掘エリアでは、皆が一様にツルハシを手に鉱石を掘っている。

額に汗を滲ませながらも、一心不乱にツルハシを振るい、掘り出した鉱石を〈収納魔法〉へ詰め込み、また掘る。詰め込む。その繰り返しである。

全員が黙々と作業を続けていると、大きな声が響き渡った。

「よーし！　お前らー！　昼飯の時間だ！　手を止めろー！」

「「うーっす」」

その声を合図に各々手を止め、休憩を始めた。

そんな中、一人の少女が俺――宮野空に近づき声をかける。

「ソラー、今日のお昼何ー？」

「昨日美味いウィンナーが手に入ったから、ホットドッグだ。夜はそれを使ったポトフだぞー」
「やったー！」
「楽しみですね～」
喜ぶ少女――シャロと〝もう一人の女性〟。
俺は今、ドレスラードを離れ、この鉱山都市に出稼ぎに来ていた。
なぜそうなったのか――話は十日ほど前にさかのぼる。

◇

やあ皆。俺の名前は宮野空。
突然何を言っているんだコイツ、と思うだろうが、俺がこれまで経験したことを簡単にまとめようと思う。
親友の佐々木翼とともに登校していたある日のこと――教室の扉を開けると突然まばゆい光に包まれた。
その結果、俺はなぜか何もない草原へと転移していた。もちろん俺一人だ。
そう、俗にいう「異世界転移は草原スタート!?」というヤツだ。タイトル回収っていうね。タイトルって何だろうね？
そんなわけでいきなり異世界に放り込まれた俺は、草原で一日サバイバルをしたあと、カールという商人の護衛をしていたマルコさんたちシルバーファングの面々と出会い、ドレスラードの街へと連れていってもらった。正直、この人たちには感謝してもしきれない。命の恩人たちだ。
さて、街に着いた異世界初心者の俺に、怒涛の展開が待ち受けていた。
マルコさんの紹介により、泊っている宿屋の娘である恐怖心が欠如したタンク少女のシャロと出会い、二人一緒に異世界での日々を過ごしていた。いろいろあったが、体に刻まれた数々の傷痕を見ると魔物との死闘を思い出す。特に脇腹にある傷はホーンラビットという魔物の角が刺さってできた初めての傷なので思い出深い。
そんな日々を過ごしていたある日、俺は〝血濡れの魔女〟と恐れられている――アナスタシア・ベールイと出会った。
出会った当初は彼女にまつわる噂を知らなかったので、かなりの美少女とお近づきになれたと思っていた。
そのあとに血濡れの魔女についての話を知ったのだが、俺には「だから何？」という感情しか生まれなかった。
だからだろうか……その後、アナスタシアことアナとともに、ヒュージロックタートルという山を思わせるほどデカい魔物の討伐に駆り出されることに。
正直意味がわからなかったし、今でも意味がわからないが、俺はその件をきっかけにアナという一人の少女がどういった人物なのか理解できた。
今の俺は弱い。だからこそいつかは彼女の隣に堂々と立てる男になろう――そう心に誓った。

その後もいろいろあり、ドレスラードの街を治める貴族アネモス家からパーティーに招待された――俺ではなくアナが。

そしてなぜか俺も参加することになり、そこでアネモス家の令嬢であるアウラ・ファン・アネモス・ドレスラードと知り合いに。

本来はヒュージロックタートルの魔石を披露するパーティーだったのだが。

思わぬ襲撃者が現れ、それをアウラお嬢様が一掃。俺も一役買うことができたんだ。

そんなアネモス家のパーティーから一夜が明け――

アナは事後処理のため再びアネモス家に呼び出されていた。

本人は「めんどくさい」とボヤいていたが、迎えの馬車に乗ってアネモス家に向かった。

俺には声がかからなかったのでアナを送り出し、いつものようにシャロとともにドレスラードの冒険者ギルドへ来ていた。

［鉄］ランク用の掲示板で良さげな依頼を物色していると、背後から声をかけられた。

「ソラさん。シャロさん。ちょっとよろしいですか？」

冒険者ギルドの受付嬢、アイリさんがいつの間にか背後に立っていた。

「おはようございます。何か用ですか？」

「何かいい依頼でもあるんですかー？」

「依頼ではありませんが、二人にギルドからお伝えしたいことがあります」

俺とシャロは顔を見合わせ、手招きされるがままに受付カウンターへと向かう。

アイリさんが定位置につき、姿勢を正して告げた。

「――ゴホン。お二人の功績が一定数に達したため、［銅］ランクへの昇格が可能となりました」

「［銅］に昇格⁉　本当ですか⁉」

「アイリさん！　それ本当⁉」

「ええ、本当ですよ。昇格なさいますか？」

冒険者のランクは一番下から［鉄］、［銅］、［銀］、［金］、［白金］の順になっており、世間では［鉄］ランクは駆け出しのヒヨっ子扱いなので、［銅］ランクでようやく一端の冒険者を名乗ることができる。

ついに俺たちの頑張りが認められたのだ。ならば答えは決まっている。

「［銅］ランクへ昇格します！」

「あたしも！　お願いします！」

「はい。ではこちらで手続きを進めますね。二人とも、おめでとうございます」

俺とシャロは今日、駆け出しのヒヨっ子を卒業し、一人前の冒険者への道を一歩踏み出した。

◇

俺とシャロは、［銅］ランクの掲示板の前で依頼書を眺めていた。

うーん、どれにするか……ここは無難にゴブリン討伐に行くか？　［銅］ランクになって最初の依頼がゴブリン討伐というのもなぁ。
シャロと二人で依頼を吟味していると――
「お二人さん。ちょっとよろしいですか？」
アイリさんが、再度後ろに立っていた。今度はどんな用事だろうか。
「何ですか？」
「実はお願いしたいことがありまして……」
俺らにお願いとは……大したことはできないが、内容くらいは聞いておこう。
「俺らにもできそうなことなんですか？」
「はい、実はある方をゴブリンの森まで案内してあげてほしいんです」
ゴブリンの森――以前はワイルドボアの森だった場所だ。正式な名称はちゃんとあるらしいが、皆出現する魔物の名前で呼んでいるためそういう呼び名になっている。
他に目ぼしい依頼もなかったので、そこに行こうかと思っていたからちょうどいい。
「わかりました、シャロもいいか？」
「いいよー」
「良かった……誰も引き受けてくれないので助かります」
……早まったか？　やっちまった感がすごい。
「それでは、お連れしますので待っててくださいね。絶対ですよ!!」

俺らの返答を聞くよりも早く、アイリさんが一人の女性を連れてきた。
「お待たせしました。それではお願いしますね！」
アイリさんが連れてきたのは一人の女性。
金髪のボブヘアーに赤い瞳。腰にメイスを携えた、シスター服を着た女が立っていた。
「初めまして。ゲバルト派所属のマリアと申します」
ゲバルト派――それはこの世界を作ったとされる創造神を崇める「クリエイト教」の宗派の一つである。
この世界では大きく分けて三つの宗派が存在する。
中立派の「シンビオシス派」。
人種至上主義派の「スプレマシー派」。
そしてその中でも、最も過激とされる武闘派の「ゲバルト派」。
そんなゲバルト派の教えは「創造神様がお創りになられたこの世界に湧く、蛆虫――魔物を一匹残らず根絶やしにすることこそが我らが使命」というもので、魔物の根絶を掲げている。
そして、この街にある教会はゲバルト派が運営している。
彼ら、もしくは彼女らは冒険者ギルドに冒険者として登録していて、生粋の武闘派集団となっている。
武闘派ではあるが、仲間を何よりも大切にする気質を持っており、もし仲間の誰かが危害を加えられたのなら、教会総出でその相手を取り囲み棒で叩きのめす……なんて噂もあるほどだ。

本当かどうかはわからないが……多分本当だ。この前、棒を持ったゲバルト派の集団を見かけたから……

右の頬を打たれたのなら、左右の頬を集団で殴り返す。やられたら倍以上でやり返す。そんな宗派だ。

その宗派所属の女性が目の前にいるわけで……他の人たちが断った理由はこれか。とはいえ、引き受けた以上はちゃんとしないとな。

「えっと……俺はソラといいます」

「あたしはシャロでーす」

「これはご丁寧に。本日は私のお願いを聞いていただきありがとうございます」

……あれ？　思ったよりまともだ。もっと血に飢えてる感じかと思ったんだけどな。実際他の人たちはそうだし。

「ゴブリンの森へ案内するだけでいいんですか？」

「はい。お手数おかけしますが、何分この街に来たばかりなので、右も左もわからない状態でして～」

なるほど、そういう感じね。いや待てよ……なんで同じ教会の人たちと行かないんだ？　……詳しく聞かない方がいいな。面倒事になりそうだし。

「出発はいつにしますか？」

「お二人がよろしければ、今からでもいいでしょうか？」

「今からですね、俺たちは問題ないです」

「オッケーでーす」

そんなわけで、俺たち三人はゴブリンの森へと向けて出発することにした。

◇

森の入り口付近に到着。ここまで魔物に出くわすこともなく、平穏な道中だった。

なので道中、マリアさんの話を少し聞くことができた。

歳は俺の二つ上で二十歳らしい。三日前にドレスラードに到着したばかりで、いろいろと手続きを終えたので、次は街の周辺の地理を知るためにギルドへ来たのだそうだ。

「なんで教会の人と一緒に行かないんですかー？」

シャロが聞きづらい質問をする。俺ですら触れるのをためらったのに……

「ええ、お恥ずかしながら他の方々から避けられていまして……」

え……気まず。周りから避けられていることを本人の口から聞くのはけっこうキツいって。

「そうなんですねー、あたしもソラだけが組んでくれたんですよー」

「まあ、そうなんですか？　では私たちは〝お仲間〟ということになりますね～」

なんだかシャロとマリアさんが打ちとけていた。険悪な空気にならなくて良かった。

そんな感じで、森の中を話しながら歩いていた俺たちだったが、不意にマリアさんが立ち止まると、ある方角をじっと見つめだした。

「どうかしましたか？」

俺とシャロも足を止め、マリアさんの視線の先の方角を見たが、特に違和感はなかった。

「多分――あっちに魔物がいますね」

不意に、マリアさんがそんなことを口にした。

……この人もしかして索敵ができるのか？　だとしたら俺たちのパーティに欲しい人材だ。これは思わぬ掘り出し物と出会ったかもしれないぞ！

そう思っていると、遠くの茂みが揺れているのが見えた。

おお？　まさか本当に魔物がいるのか！

そして――茂みからゴブリンが三匹現れた。

俺は本当に魔物が出たと驚いたが――それよりも驚く行動をする者がいた。

「――ッ⁉　殺してきます!!」

マリアさんがその場からダッと駆け出し、ゴブリンへと向かっていった。

その瞬間、俺は悟った――あっ……ヤベー女だ、と。

ゴブリンとの距離を詰めたマリアさんが、手に持つメイスをゴブリンの顔面目掛けてフルスイングすると、ゴブリンの一匹の頭が大きく損壊し、そのまま絶命。

残りのゴブリンがすぐにマリアさんに向かって襲いかかるが、マリアさんは一番近いゴブリンに

前蹴りを食らわせると、流れるような動きでもう一体の頭に回し蹴りを放つ。
回し蹴りを顔面に食らったゴブリンの首がブチブチと音を立て一回転すると、そのまま体が地面へと倒れた。
最後にマリアさんは、腹を押さえて蹲るゴブリンの頭にメイスを振り下ろした。
――瞬く間にゴブリンの死体が三つ出来上がった。
……なるほど、戦闘力は問題なしと。
「おー、すごいねー！」
シャロがのんきな声で歓声を上げた。
……さて、ゲバルト派のシスターだけあってヤベー女だとわかったわけだが……なんで俺の周りの女はヤバいのが多いんだ？
とりあえず、マリアさんのもとに行くか。
俺とシャロがマリアさんに近づくと、マリアさんは俺たちに頭を下げた。
「す、すみません！　実は私……魔物を見ると襲いかかりたくなるんです」
あの宗派ならそうだろうな。たしか「魔物は積極的に殺せ！」だったか？　戦闘好きしかいないってもっぱらの噂だ。マリアさんの見た目は清楚なシスターさんなのに……

その後も森を進んでいったのだが、魔物が出るたびにマリアさんは突撃を繰り返した。
ゴブリンは基本的にマリアさんに頭を潰されるので、討伐部位の採取ができない個体が多かった。

ワイルドボアくらいだな、原形をとどめているのは。鉄山靠であの巨体から繰り出される突進を押し返した時は驚いたな。
それにしても……うーん。マリアさんのコレって、もしかして。
俺はあることに気づいたので、本人に聞いてみた。
「マリアさんのそれって、もしかして加護のせいですか？」
俺の言葉に、マリアさんは驚いたような表情をすると、すぐに認めた。
「……はい。私の加護の呪いが〝魔物を見ると襲いかかる〟というものなんです」
「あー、やっぱりそうなんですね」
加護の呪いか……それなら俺にはどうにもできない。加護は正確には「祝福と呪い」と呼ばれるメリットとデメリットを併せ持った先天性の体質のようなものだ。
しかし「魔物を見ると襲いかかる」か。
たぶん相手が強くても問答無用で襲いかかりたくなるんだろうな。
仲間たちに避けられてる原因はこれか……まてよ？
俺は閃いた。
「魔物を見ると襲いかかる」。それはつまり、魔物が見えなかったら襲いかからないんじゃないか？
加護の呪いは、割とそういう抜け穴があったりすると聞く。試してみる価値は十分にある。
「マリアさん。次、魔物の気配がしたら目を瞑ってもらってもいいですか？」
「目を――ですか？　いいですけど、何かお考えでも？」

「ええ、魔物を見ると襲いかかるわけですから、要は魔物を見なければいいと思いまして。まあお試しってことで。何かあっても俺らが守りますんで安心してください」
マリアさんは少し考える仕草をしたあと。
「わかりました。私もその方法は試したことがないのでやってみます」
承諾してくれた。よし。これで解決するなら簡単だ。
そりゃ魔物を前にして目を瞑るなんて自殺行為だし、試したことがあるわけないか。

そこからさらに探索を進め――不意にマリアさんが立ち止まり、視線を別方向に向けた。
「マリアさん。目を瞑ってください。シャロ。マリアさんを守ってくれ」
「わかりました～」
「はーい」
マリアさんはシャロの側に移動し、目を瞑る。
茂みがガサガサと音を立て始め――一体の〝ハイゴブリン〟が現れた。
何でこんなタイミングで出てくるかな……
距離はまだあるので、マリアさんの様子を見る。
……よし、襲いかからないな。やはりこの呪いは〝魔物を見る〟のが発動のトリガーのようだ。
聞いた話では、加護の呪いの中には特定の動作や状況で発動するものがあるらしい。
シャロのように「恐怖心の欠如」といった、初めから何かがなくなっている呪いはどうしようもないが、こういう〝何かをすると何かができない〟みたいなのは回避できる場合がある。
アナから聞いたのだが、アウラお嬢様も加護持ちらしく、「武器の類が持てない」という呪いがあるそうだ。ナイフやフォークも、武器にしようと思った瞬間に手から零れ落ちるんだとか。
籠手を装備して戦うのはそれが理由らしい。殴るんなら籠手は武器じゃないの？　と思うかもしれないが、籠手は防具判定のようなのでセーフらしい。武器判定の基準がよくわからん。
そういった理由で「魔物を見ると襲いかかる」も、魔物を見なければ発動しないのだろうと思ったが、どうやらその考えは正しかったようだ。
とはいえ、マリアさん一人の状況では魔物を前にして目を瞑るなんてできないので、あまり有効な手段ではない。
パーティを組めればいけそうだが、同じ教会の人たちからは避けられてるらしいからな……遭遇時の突撃がなくなるだけでもだいぶマシか？　シャロが〈挑発〉で引き付けたあとに目を開ければいいわけだし。
「やっぱり目を瞑ってると大丈夫そうですね」
「ということは、魔物がいるのですか～？」
「ハイゴブリンがいるねー」
「ハイゴブリンですか～？　私、まだ見たことがないんですよね～――ッ」
「あっ」
目を――開けやがった。

マリアさんはシャロの後ろから飛び出し、ハイゴブリンへと襲いかかる。
こ、この女、ふざけやがって！
俺はすぐにあとを追い、シャロに指示を飛ばす。
「シャロ！　〈挑発〉だ！」
「はーい！　〈挑発〉!!」
シャロのスキルにより、ハイゴブリンの敵意を向ける先はシャロに切り替わったが――
「〈盲目〉！」
マリアさんとハイゴブリンの接触が先に起こるため、俺は視界を奪う〈盲目〉で牽制する。
突然視界を奪われたハイゴブリンはその場で立ち止まると、手に持つ棍棒を滅茶苦茶に振り回し始めた。しかし、そんな行動を意にも介さずといった様子で、マリアさんはハイゴブリンへと殴りかかる。
マリアさんのメイスは、ハイゴブリンの頭に、ハイゴブリンの棍棒はマリアさんの左腕に当たり――お互い相打ちの形で武器が交差した。
ハイゴブリンは頭の半分を損傷し、マリアさんは近くの木に叩きつけられた。
俺はマリアさんの攻撃でふらついているハイゴブリンに近寄り、首を狙って剣を振り抜く――その手応えは驚くほどあっさりしていた。
ハイゴブリンの首が地面に落ちるよりも先に、俺はマリアさんの側へと駆け寄った。
「マリアさん！　大丈夫ですか!?」

「はい。私は平気ですよ～」
思ったより軽い返事があった。木に叩きつけられた衝撃で意識が変になっている、というわけでもなさそうだ。マリアさんはメイスを杖代わりにしながらも、平然と立ち上がっていた。
立ち上がったが……左腕が変な方向に曲がっていたので、俺はすぐにヒールポーションを使おうとする。だがマリアさんはそれを手で制し、こう言った。
「あ、大丈夫です。ほっといたら治りますので～」
いやいや……たしかにほっといたら治るだろうけども、それだと時間がかかりすぎるし、添え木で固定しないといけないわけで……
俺の頭にはクエスチョンマークが浮かんだが、無理矢理ヒールポーションを振りかけようとした。すると――マリアさんの腕から赤い煙が噴き出すとともに、折れた腕が回復し始めた。
「……へぇ？」
思わず間抜けな声が漏れる。回復魔法やヒールポーションを使っていないというのに、曲がった腕が、ひとりでにもとの向きへと戻り始めているのだ。
俺はその光景をポカーンと見つめることしかできなかった。
「えー！　なにそれ、いいなー！」
シャロはそんな光景を目の当たりにしても、能天気な感想を述べている。
……確かに傷が勝手に治るのはいいよね。心の中でシャロに同意し、俺は考えるのをやめた。
「申し訳ありません。折角うまくいっていましたのに……」

いろいろと聞きたいことはあるが、今は素直にマリアさんからの謝罪を受け入れた。
その後は、ハイゴブリンから討伐部位と魔石を回収し、今日の狩りは終了することにした。
もちろん帰り道も魔物を見つける度に、マリアさんは襲いかかっていった。
もうこの人、目隠しして連れて帰ろうか……
そりゃ同じパーティ組みたくないよな。やり過ごすってことができなくなるわけだし。いつも以上に疲れた……このまま何事もなく街まで帰れるといいな……

◇

最終的に、目隠しをされてシャロに手を引かれながら歩くシスターの図が完成したが、何とか街まで帰ってくることができた。
三人で冒険者ギルドへと向かい、今日の成果を収める。
大半の魔物をマリアさんが仕留めていたので、報酬は彼女に多めに渡すつもりだったが――
「いえ、今日は私のお願いを聞いていただいたわけですので、三等分でお願いします～」
「……わかりました。それじゃあ夕飯でも一緒にどうですか？」
「いいねー！　サービスしますよー」
俺の言葉にシャロも続けた。
俺とシャロはほとんど何もしてないんだし、夕飯を御馳走するくらいはいいだろう。もっとも、来てくれればの話だが。
「そうですね……では、お言葉に甘えますね」
そういうことになった。

流石に冒険終わりの格好のままではゆっくりできないということで、マリアさんが住んでいる教会へ向かい、マリアさんの着替えが終わるのを待つことになった。
シャロと二人、外で待っていると、教会の人だろうか、年配のシスターさんに話しかけられた。
「もしかして、マリアと一緒に組んでくれたのですか？」
「あー、組んだというか、ゴブリンの森を案内した感じですね」
「そうですか。あの子は加護の呪いのせいで苦労していますからね」
やっぱりあの呪いじゃ大変だよな。
とりあえず、今日わかった対処法を教えておいた。
「なるほど。魔物を見ないようにするだけでいいのですね。ありがとうございます。今日一日一緒にいただけでそこまでわかるなんて、相性がいいのかもしれませんね？　そう思いません？」
……この人、俺らに押し付けようとしてる？　いやいや……シスターさんなんだし、本当にそう思っているだけだよね。そうだよね？
シスターさんと話していると、マリアさんが戻ってきた。
シスター服――ではなく普通の街娘みたいな格好だった。

普段着もシスター服というわけではないようだ。
俺はシスターさんに別れを告げ、その場をあとにした。

陽も暮れ始めた頃、俺たち三人は宿屋に到着した。
着替えのため一度自室に戻り、〈清潔魔法〉で一日の汚れを落とすと、ベッドへ倒れ込む。
やっぱり生活魔法は凄いな。〈収納魔法〉〈清潔魔法〉〈照明魔法〉〈着火魔法〉〈水生成魔法〉。
そんな便利すぎる魔法が、見ただけで使えるようになるなんて。開発した百年前の勇者、シズク・ミズノは化け物だ。
あー、それにしても疲れた。今日一番疲れたのがマリアさんの魔物に対する問答無用の突撃への対処だ。集団だろうとお構いなしに突っ込むため、ほとんどの戦闘が乱戦になってしまっていた。
ワイルドボアの群れに突っ込むとかほんと勘弁してほしい。今日は、飯食って早めに寝よう。
俺は部屋着に着替えてから一階へと向かった。

食堂では既にマリアさんとシャロが座っていた。
マリアさんには先に座ってもらっていたが、シャロももう着替えを終えて準備を済ませていたようだ。
二人の座るテーブルへと向かい、普段座っている位置に着席する。よっこらせ。
「あの……料理を注文してもよろしいでしょうか？」

俺が席に着くなり、マリアさんがメニューを見ながらそう言った。
多分、俺たちが戻ってくるまで、注文するのを我慢していたのだろう。
「いいですよ。何にします？」
「え～とっ、これと、これと――あとこれも。あ～、こっちも追加でぇ～」
めっちゃ食べるな……シャロでもそんなに食べないぞ。
「――あっ、その、加護の影響で、ですね……お腹がすごく空きやすいので……すいません」
「そうなんですねー。じゃあいっぱい食べないとですねー！　あたしも食べるぞー!!」
「ですね。気にしなくていいですよ。シャロもそれなりに食べるので」
折れた腕を即座に治せるレベルの加護なんだし、それくらいのデメリットがあっても不思議じゃない。回復に使った分のカロリーを欲している感じかな？
マリアさんの分とは別で俺とシャロの分も注文する。
しばらくして、料理が続々と運ばれてきた。テーブルに並ぶ料理を見て、マリアさんは紅い瞳を目一杯輝かせていた。
「わあ……すごいですね。初めて見る料理ばかりです。どれも美味しそうですね～」
「お兄ちゃんが作ってるから美味しいですよー」
「シャロさんのお兄さんが？　なるほど。では、頂く前に創造神様に感謝を――」
そう言ってマリアさんは手を胸の前で組み、何やらブツブツ唱え始め、祈りを捧げた。
おお、すごい聖職者っぽいぞ……なんかホク〇とかケン〇ロウとか聞こえた気がするが……聞

かなかったことにしよう。

元の世界にいた頃は、宗教なんて微塵も関心がなかったし、食事のたびに祈りを捧げるのも面倒じゃね？　と思っていたが、魔法が使えるこの世界では、もしかしたら神様というものを身近に感じることができるのかもしれない。会ったことないけど。チートよこせよマジで……

そもそもな話、日本人である俺には一神教というものがうまく理解できない。

神様なんて一人よりも、いっぱいいた方がお得じゃね？　と思ってしまう。八百万の神という信仰対象があるわけで、この辺の感覚は日本人特有のものなのかもしれないが、俺はお得な方がいい。

そう考えているうちに、マリアさんの祈りが終わり――フォークを握りしめながら言った。

「創造主様の作り賜うた魔物以外のこの世のすべての命に感謝を」

俺とシャロもそれに続き。

「「いただきます」」

夕食が開始された。

いやー。マリアさんめっちゃ食うな。シャロ以上に、食べる食べる。

聖職者だから粗食を重んじる、なんてことはなく、食いっぷりも飲みっぷりも見事だ。これはシャロを超える逸材やもしれない……

そう思ってシュワシュワ――魔力が含まれることで酔いに近い状態を味わうことができる飲料

だ――を片手に眺めていた俺の肩に、とても冷たい手が添えられた。

「ソラ。その女――――誰？」

シュワシュワでポカポカしていた体が一気に冷えるのを感じた。コップを口に付けたまま固まる俺は、シャロに目配せをする。

「お前から事情を話してくれ」その思いを目に込め、シャロを見る。

そんな俺の視線を受け、シャロは一つ頷き――食べるのを続行した。

……はぁ～～！　つかえねえヤツ!!

マリアさんが自己紹介をしてくれるかと思ったが、こちらも口いっぱいに頬張っていて難しそうだ。

俺はコップをテーブルに置き、肩に添えられた手を握りながら振り返り言った。

「お帰り、アナ。この女性は最近この街に来た教会の人でな。マリアさんと言うんだ。アイリさんからの頼みで、ゴブリンの森を案内したんだよ。まあせっかくだから夕食でも一緒にとろうと思ってな？　ここに招待したんだよ。別に変な意味とかじゃなくてね？　ほんとにただ一緒に夕飯をってだけなんだ。ほんとに、変な意味はないんだ。下心とか微塵もないからさっ、ほらシャロからも何か言ってくれよ。マジで。頼みますよホント」

「概ね、そのとおり」

「肯定してくれてありがとう」
俺たちのやり取りを見ていたマリアさんが口を開く。
「初めまして。私はマリアと申します。お二人に案内をお願いしたのは私ですので、あまり責めないであげてください」
「……アナスタシア・ベールイです。［白金］ランクの冒険者をしています」
心なしか、［白金］ランクを強調していたように聞こえた。
「まあっ！　アナスタシア・ベールイと言えば……たしか血濡れの魔女と呼ばれている方ですよね？　王都にいた頃からお噂はかねがね伺っております。私、初めてお会いしました～」
全く動じないマリアさんの態度に、アナも少し対応を軟化させていた。
「……それなら、まぁ。あの、その、ごめんなさい」
「何か謝られるようなことをされましたか？」
強いな……アナ相手に怖がらずにグイグイいける人物は貴重だ。
そこで、シャロがコップをグイッとあおり、テーブルに置いて言った。
「アナちゃんも一緒にご飯食べようよー」
「え？　あっ、そうだね。そうします……」
アナも席に座り、メニューを手に取ると顔を覆った。少し耳が赤くなっている。
何か勘違いして恥ずかしくなったのかな？　可愛いね。
俺は軽く凍っている肩をさすりながらそう思った。

◇

食事を終え、別れを告げると各々の帰る場所へと向かった。シャロは寝るようだし、アナは本を読むとか言っていた。マリアさんも教会へと帰るというので、送ろうかと言ったが――
「いえ、自分の身は守れますので～。それに、このネックレスを着けているとそういった輩に襲われることはありませんので、ご心配なく～」
そう言って見せてくれたのは、ゲバルト派の証であるネックレス。これを身に着けているということは、その人物がゲバルト派所属の人間であるということだ。

一人で勝てぬのなら、二人で。
二人で勝てぬのなら、四人で。
四人で勝てぬのなら、全員で。
その教えのもと、やられたらやり返す。

それが、ゲバルト派というものだ。正直関わり合いたくない……関わり合いたくはなかったが、知り合いになってしまった。なんでだろうね？
しかし、マリアさんは結構美人なんだよな。年上で、物腰が柔らかく、少しタレ目がちな赤い瞳

でじっと見られると、ドキッとしてしまう。
アナより胸は小さめな感じもするが、それでもデカい。戦闘中は胸当てで動かないようガッチリ固めていたみたいだが、私服に着替えたあとはなかなかのものだった。良いおモチをお持ちのようで。
……他のゲバルト派よりはマシだろうか。ヤベー女ではあるが、それは魔物に関してだけだし、知り合いのポジションをキープしておけばいい話だ。
とにかくそんなわけで、マリアさんは一人で教会へと帰っていった。
俺もそろそろ寝よう。そう思いふと昼間のことを思い出す。
マリアさんがダメージを与えたあととはいえ、ハイゴブリンをあっさり倒すことができた。初めて遭遇した時のような怖さはもう感じない。
俺も強くなってきてるんだな――フッとニヒルな笑みを零し、自分の部屋へ向かった。

2. 【銅（ブロンズ）】ランクの依頼

俺とシャロは冒険者ギルドへ来ていた。
昨日は、アイリさんの頼みでマリアさんと一緒にゴブリンの森で狩りをした。だから今日は【銅（ブロンズ）】ランクの依頼を受けるべく、掲示板を眺めていた。すると、またも背後から声をかけられた。

「ソラさんにシャロさん。おはようございます」
振り向くと、マリアさんが立っていた。
シャロと俺も挨拶を返す。
「おはようございまーす」
「おはようございます。マリアさんも、何か依頼を受けに？」
「はい。この街の周辺の地理を覚えたいのでいろいろと受けようと思いまして」
真面目な人だ。俺ですら何となくで覚えたのに、自分から積極的に覚えにいくとは。
しばらく雑談していると、すっと誰かが近づいてきた。
「おはようございます。ソラさんにシャロさん。それにマリアさんも。今――お暇（ひま）ですか？」
アイリさんが、何かの紙を手にしている。
「まだ依頼を選――」
「はい！　実はお勧めの依頼が今朝（けさ）届きまして！」
食い気味で返してきたな。
「……どんな依頼ですか？」
「この街から乗合馬車で五日ほどの距離にあるルクバトウ鉱山都市での採掘作業です」
「採掘作業ー？　それって冒険者がする仕事なのー？」
「普段なら専属の鉱夫（こうふ）がいますが、今回は事情がありまして……実はこのルクバトウ鉱山都市は、十年に一度『鉱石喰（こうせきぐ）らい』という魔物が現れるんです」

「鉱石喰らい、ですか？」
「はい。あっ正式名称は『オルスコーピオン』といいまして、ロックタートルとは違い、この魔物は鉱石だけを狙って食べるんです。その魔物が十年に一度、群れで鉱山に現れるため、対策として毎回ギルド経由で冒険者を雇い、鉱石を根こそぎ採掘するんです。それが今回の依頼になります」
なるほど……つまり臨時の採掘員を募集してるのか。
この世界では、なぜか自然物が時間経過とともに再生する仕組みになっていて、鉱石も例外ではない。時間が経てば取り尽くしても少しずつ再生していくらしい。元の世界じゃ考えられない現象だが……魔法の力ということで無理やり納得するしかない。
それにしても、この街を離れる依頼か……はてさて、どうしたもんかな。
「アイリさん、この依頼って、どれくらい報酬が出るのー？」
シャロが報酬のことを聞き始めたので、考えるのはひとまず保留。
「この依頼は少し特殊でして、採掘した鉱石をルクバトウ鉱山都市が直接買い取る形になります。つまり、鉱石を採れば採るほど報酬は上がるというわけです。希少な鉱石を掘り当てれば一攫千金も夢じゃありませんよ！」
「やろうよ！　ソラ！　ね？　いいでしょー？」
「……はいはい」
シャロの目が完全に¥マークになってやがる……まあ、他の街も見てみたいし良い機会か。
「あのー」

マリアさんが小さく手を上げ、何か言いたそうにしていた。
「どうしました？」
「私もその依頼を受けることは可能でしょうか～？　お恥ずかしい話ですが、実は王都からの引っ越しで手持ちがほとんどなくて……」
どうやらマリアさんもこの依頼に興味があるようだ。
「アイリさん。この依頼って人数制限ありますか？」
「いえ、［銅］ランク以上であれば人数に制限はないので、問題はありませんね」
人数制限がないなら問題ないか。あとはシャロ次第だが――
「マリアさんも一緒に行くの？　三人でいっぱい稼ごうね！」
まあ、シャロはこういうヤツだよな。
「シャロもこう言っていますし、一緒に行きますか？」
「はい。ご迷惑でなければご一緒させてもらいます～」
こうして旅の仲間が一人増え、［銅］ランクになって最初の依頼は、ルクバトウ鉱山都市での採掘依頼に決まった。昨日の案内はあくまでも案内なのでノーカンってことで。
「では、こちらの書類を向こうの冒険者ギルドへ渡してください。依頼完了後にサインをもらい、再度こちらに持ってきてくださいね」
「わかりました。ちなみに用意しておく道具とかはありますか？」
「そうですね……ツルハシの類は向こうが用意するそうですが、自分で用意した物を使っても構い

ませんよ。それ以外ですと……やはり宿ですね。他の街からも冒険者が大勢来ますので、安いところはすぐに埋まってしまいますね」
他の街からも来るのか……いや、当たり前か。俺たちだけってわけじゃないんだし。そうと決まれば、早く準備して向かった方がいいな。
「アイリさん、ありがとうございます。さっそく準備して早めに向かいますね」
必要な物はツルハシか……カールさんの店か、ヴィーシュさんが作ってたりしないかな。帰りに寄ってみるか。

◇

結果から言えば、ツルハシはヴィーシュさんが一日で作ってくれることになった。
なんでも、ルクバトウ鉱山都市に兄弟がいるらしく、ツルハシを作る代わりに、会った際はヴィーシュさんは元気でやっていると伝えるように頼まれた。
ツルハシと装備の手入れを特急で行ってくれることになったので、それまでに他の準備を済ませておくことに。
まずはルクバトウ鉱山都市の道中で食べる料理の材料を買いに、市場へとやってきた。
なんせ今回はよく食べるマリアさんも一緒だ。普段以上に作っておかないといけない。
「というわけで、行きと帰りの食材を買うぞー」

「おー！」
「は～い。あ、私の分はちゃんと出しますので。会計は別でお願いします～」
俺たちは市場をぶらぶら歩きながら、いろいろな食材を買い込む。
目新しいものはあまりないな……未だに醤油や味噌は見つかっていないし、次に行く街にあればいいな。
そう思っていたところ、どこからともなく「ビービーッ」と、けたたましい音が鳴り響いた。
音のした方を振り向くとそこでは、身なりの汚い子供が店員に取り押さえられていた。
この世界に来てから何度か見かけたことのある光景だ。おそらく子供は、〈収納魔法〉に商品を入れようとしたのだろう。
百年前の勇者がばら撒いたという「生活魔法」は一度見るだけで誰でも使える性質上、病原菌のように世界中に広まった。
そんな便利な魔法の中でも、真っ先に悪用されたのが〈収納魔法〉だ。
この魔法は物を入れさえすれば本人以外には取り出せないため、出回り始めた当初は商人たちがかなりの損害を被ったという。一応、発動時には声に出して「〈収納魔法〉」と唱え、同時に魔法陣が出現する仕様なので、発動自体はわかりやすい。
だが、それを巧妙に隠す者もいる。そうなると当然ながら、万引きや盗みが横行する。
そこで商人たちは様々な魔法使いの協力のもと、とある魔法を開発した。
それは――〈盗難防止魔法〉である。

〈盗難防止魔法〉がかけられた商品を〈収納魔法〉に入れようとすると、魔法陣に触れた瞬間、けたたましい音とともに弾かれるようになる。
詳細な効果は商人しか知らないが、とにかく盗もうとすると音が鳴るので商品を買う際は指差しを行い、店主の目の前で〈収納魔法〉へ入れるのがマナーとされている。
そもそもこの異世界での万引きや窃盗は、元の世界以上に重い刑罰が科されるので、切羽詰まった者以外は基本的には手を出さない。
そして今回捕まった子供も、おそらくは孤児だろう。日本ではほとんど見かけないが、この世界ではよくある光景だ。
――ハッキリ言おう。俺はこの子供に関与する気はない。元の世界でよく見た異世界ものの物語では奴隷を解放したり、孤児院を作ったりという展開はあるが、俺にはそんな力も金も意思もないので、何もできないし、極力関わらない。
それは、俺がこの世界に来てから決めたことの一つだ。
そんな中、一人の女性――マリアさんが子供のもとへと駆け寄った。
「申し訳ございません。その子を引き取ってもよろしいでしょうか？　もちろん商品の代金もお支払いします」
「なんだお前は――あんた、ゲバルト派の人間か？」
「はい。そうです」
「……そうか、ならこのガキもちゃんと躾けろよ」

そう言って店員は、子供を地面に投げつけるように放り、金を受け取ると店へ戻っていった。
「……ぐっ」
「大丈夫ですか？　さあ、私とともに教会へ行きましょう」
マリアさんはうめく子供に手を差し伸べたが、子供はそれを振り払った。
「うるさい！　お前らみたいな奴らの手なグエッ！」
マリアさんは、悪態をつく子供の首筋に手刀を食らわせて黙らせた。
おいおいおいおい、死んだわアイツ……いや、何やってんのこの人！
「何やってんすか!?」
思わず声に出た。
「え？　私たちの教えでは駄々をこねる子供は殴って黙らせる。とあるので」
「あるので」じゃねーよ、怖いわ。
ゲバルト派がヤバいと言われる理由の一端を垣間見た気がする。
ぐったりした子供を小脇に抱え、マリアさんは言った。
「申し訳ありません。私はこの子を教会に預けてきます。後ほど宿に夕食を食べにまいりますので、食材の代金はその時でもよろしいでしょうか？」
「あ、はい」
「ありがとうございます」
ペコリと頭を下げたマリアさんは、教会へ向けて歩き出した。

なんとなく、俺を見る周囲の視線に、どこか憐れみのようなものを感じた。
「あいつ、魔女だけじゃなくて教会にも目を付けられたのか」と。

◇

少しの問題もあったが、買い物を済ませてから宿屋に戻る。アナがいたので、ルクバトウ鉱山都市へと出稼ぎにいくことを伝えた。
「あの街に行くんだ。ちょうど私の家があるから好きに使っていいよ。はい、これ鍵ね」
アナから突然鍵を渡された。
聞けばアナは、王都や他の街にもいくつか家を持っているという。
拠点としているのはこのドレスラードだが、依頼で他の街に行く時はその家で寝泊まりしているんだとか。
「いいのか？　俺たちで使っちゃって」
「うん、いいよ。最近あの街には行ってないから、掃除とかお願いしたいかな」
「それくらいだったらお安い御用だ。アナはこの街に残るのか？」
「私はこの前のパーティーの件でしばらく街を離れるのは難しいかな。一緒に行きたいけど……ごめんね？」
「そうか、それは残念だ。ところで、あの事件って結局なんだったんだ？」

「んーっとね　〝狂王神教〟とかいうのが絡んでたみたい」
「狂王神教？　なんだそれ」
初めて聞く名称だ。この世界の三大宗派とは別物なのだろうか。
「詳しくは私もわからないんだけど、狂王っていうのは五百年くらい前にいた王様なんだって。それを復活させようとしている組織が、狂王神教っていうらしいよ」
「そんな奴らがいるのか……その狂王？　ってのはどんな奴なんだ？」
「さあ？　文献が残ってないみたいだし、アネモス家の調査でも向こうがそう名乗ってることくらいしかわからないんだって。捕まえた連中も雇われただけみたいだし」
「正体不明の敵か……あんまり関わりたくないな」
「狙いは魔石だったんだし、私たちは関係ないよ」
「そうなのか？」
「うん。それに、何かあれば私が守るから安心してね？」
なんという心強いお言葉……まあ、俺から積極的に関わる気もないんだし。普通に生きてれば出会うこともないな。それにしても、思わぬところで宿の問題が解消したな。ありがたく使わせてもらおう。
アナの家を使わせてもらえるなら、急ぐ理由がなくなったな。明日ツルハシを受け取ってから、次の日に出発しようかな。よし！　そうと決まればアレックスくんに料理を手伝ってもらおう。愛する妹――シャロのためなら、快く引き受けてくれるだろう。

その後は夕方過ぎまでアレックスくんと一緒に料理を作っていたのだが……いつの間にかシャロとアナとマリアさんが、空のお皿とフォークを持って待機していた。
……まったく、少しだけだぞ？

3. お嬢様の特訓

次の日。俺たちはツルハシと装備をヴィーシュさんから受け取り、冒険者ギルドへ来ていた。
アイリさんに明日の朝出発することを伝える。
「わかりました。道中気をつけてくださいね？　それと兄さんがソラさんたちに頼みたいことがあるそうですよ」
「アッシュさんが俺たちにですか？」
「ええ、今は訓練所にいるので会ってきてください」
何だろう……あの人が俺たちに頼み事をするなんて初めてのことだ。彼は俺が冒険者を始めた時に世話になった、筋肉モリモリマッチョマン三人組のリーダーだ。頼み事の心当たりが皆目見当もつかないので、言われるがままギルド内にある訓練所へ向かった。
ちなみに冒険者ギルドの訓練所では、毎日のように誰かしらが汗と血を流しながら訓練を行っている。

俺が一歩訓練所に足を踏み入れると――数人の人影がササッと近寄り、口々にこう言った。
「今日はどんな訓練をされるのですか？」
「骨は何本折るんですか？」
「打撲！　裂傷！　骨折！　なんでも治しますよ!!」
「――散れ!!」
俺が吠えると人影はサーッと離れていく。
今の人影――もとい人たちはヒーラーと呼ばれる職業の人たちだ。
主に回復魔法を使い、街の住人の怪我を治したり、冒険者に同行して傷の手当てをしたりすることを生業としている。
そんなヒーラーたちも、回復魔法の訓練をする必要があるのだが、本来は金をもらって回復するのに、訓練と称してタダで回復するのはもったいないと考えて目をつけたのが、ここ冒険者ギルドの訓練所である。
ここなら常に怪我人が発生するため、訓練にはもってこいの場所なのだそうだ。
そしてなぜか俺は、その中でも極上の獲物のようで……回復魔法をかけると回復の上限が伸びやすいらしい。らしいというのも、一度詳しく聞いたことはあるが、よくわからなかったのだ。
回復魔法というのは、使えば使うほど効果が上がる魔法なのだが、そう簡単に上がるわけではなく、年単位で訓練しても上がらないこともあるのだとか。
そんな状況で突然現れたのが俺だ。最初は些細な変化だったが、回数を重ねているうちに、気づ

いた者が現れた。
「あれ？　コイツに回復魔法かけると上限上がるくね？」と。
そこからは早いもので、すぐに街中のヒーラーたちに情報が拡散され、俺が訓練所に行くと必ず数人がゾロゾロとついてくる。
俺としてはタダで回復してもらえるので文句はないが、先ほどのように怪我をすることを望まれるのはいかがなものかと思う。なので訓練をしない日は、声を上げ散らしている。
「まったく……えーっと、いた。アッシュさーん！」
俺は訓練所にいる目当ての人物――アッシュさんに声をかけた。
「ん？　おお、来たか。悪いな呼び出して」
「いえいえ大丈夫ですよ。それで用事って何ですか？」
「少しお使いを頼みたくてな――これをルクバトウ鉱山都市の帰りに届けてほしい」
そう言ってアッシュさんは〈収納魔法〉から手紙を取り出した。
「コレをですか？　どこに届ければいいんです？」
「モルソパという街にいる人物に届けてほしい。ルクバトウ鉱山都市から帰る時に、その街を経由してドレスラードに向かう馬車があるはずだ。帰りの日程は二日くらい延びるかもしれないが、引き受けてくれないか？　急ぎではないからそっちの依頼が終わってからで構わん」
なるほど、つまりは手紙の配達か。俺としては世話になっているので、このくらい引き受けてもいい。あとはシャロとマリアさん次第だ。

「俺は引き受けてもいいと思うが、シャロはどうする？」
「あたしもいいよー」
「マリアさんは――」
「私もお供いたしますよ～」
二人とも乗り気なようで安心した。マリアさんに至ってはついてくる必要はないのだが、一緒に旅をするなら人数は多い方がいいので助かる。
「二人もいいそうなので引き受けます。それで誰に渡したらいいんですか？」
「悪いな。詳しくはこのメモに書いてある。それとだ、帰りの運賃とモルソパでの宿代は俺が出すから、戻ってきた時に払った金額を教えてくれ。あと……まあ会えばわかるが……ソイツは悪い奴ではないからな。安心してくれ。ホント、アンシンシテクレ」
手紙とメモを受け取った俺の肩をバシバシ叩きながらアッシュさんは何度も頷いた。
何その反応……嫌な予感がするんだけど……一度受けると言った以上やっぱりやめたとは言いだせない。まあいいさ、帰りの運賃と別の街を見学する費用が手に入ると思えば安いだろう。少し良い宿に泊まろうかな？
そんなことを考えながら、俺たちは冒険者ギルドを出ようとした。
「あら。奇遇ですわね」
訓練所の出口でまさかの人物と遭遇した。
金色に輝くウェーブのかかった金髪に、赤い軽装を身に纏った令嬢。ステゴロお嬢様改め、アウ

ラお嬢様が立っていた。ドレスラードを治めるアネモス家の娘にして、黄金の風という異名を持つ［白銀（プラチナ）］ランクの冒険者だ。
「あっ……こんにちは。それじゃ用事がありますので失礼しますね」
「お待ちなさい」
ガシッと襟首（えりくび）を掴まれ俺の首が締まった。
「貴方。アナスタシアの隣に並び立つには、実力が不足していると思わなくて？」
「そ、そんなことはない。と思いたいですねぇ……」
「あらそお？　では今から私（わたくし）が貴方の実力を測って差し上げますわ！」
アウラお嬢様はそのまま俺を引（ひ）き摺（ず）る形で訓練所へ歩みを進めた。
「シャロ！　マリアさん！　助けて!!」
「オホホホ、何でしたら貴女方も私が鍛（きた）えて差し上げましょうか？」
「強くなれるんですかー？」
「ええ、もちろん」
「ついていかなければ、ソラさんは解放されない感じですか～？」
「解放してほしくば力ずくで奪ってごらんなさい」
シャロとマリアさんは顔を見合わせると、頷き合いそのままアウラお嬢様のあとに続いた。
いやまずは俺を助けろよ。何で二人とも覚悟決まった表情をしてるんだよ。
そのまま俺たちは訓練所のど真ん中まで連れていかれた。

「――グエッ」
そして、俺はなぜか放り投げられ、地面へダイブした。
いててて……こ、このお嬢様！　俺が権力に逆らう気がないからといって好き勝手しやがって！
理不尽な仕打ちに闘争心がメラメラと燃え上がる俺とは対照的に、アウラお嬢様は冷静な表情で両手に分厚いグローブを装着していた。
何あれ……ボクシングのグローブに似ているな。
俺の視線に気づいたアウラお嬢様が説明を始めた。
「これはダメージが十分の一になる効果が付与された籠手ですの。ですので、安心してかかってきなさいな」
「言ってる意味がわかりません!!」
「それでは始めましょうか」
待って。この人俺の話を聞く気がない！　仮にも貴族令嬢だろアンタ。何でただの冒険者である俺と殴り合おうとしてるんだよフットワーク軽すぎない!?
アレコレ考えていると拳が飛んできた。
「ぶっ――！」
顔面に拳を受け、漫画（まんが）のように吹き飛びゴロゴロ転げ回ると、すぐさま待機していたヒーラーが駆け付け回復してくれた。

「訓練するなら言って下さいよ～」と笑顔で俺に回復魔法をかける姿はとても嬉しそうだ。回復ありがとうございます。
ふらつく体を無理矢理起こした俺に、アウラお嬢様は言った。
「では、参りますわね」
「ちょ！　まっ！」
ダメージが十分の一でも、飛んでくる拳は目に見えるスピードじゃない。俺は避けることもできずにサンドバッグのように殴り飛ばされ続けた。
ヒーラー共は「今日は大忙しだな！」とか嬉しそうに話していた。
倒れては回復され、殴り飛ばされ、回復され、殴り飛ばされ、回復され、を繰り返すこと数十回。
ようやく目が慣れたのか、腕でガードすることに成功した。
成功したが、威力を殺すことはできないので、そのままガードごと吹き飛んだ。
その後、さすがの俺もキレた。相手が貴族令嬢であることを忘れ、殴りかかる。
「死ねやおらあああ！」
「シッ！」
カウンターで顎を撃ち抜かれ、糸の切れた人形のように崩れ落ちると、そこで俺の意識は途絶えた。

◇

目を覚ました時にはなぜかギャラリーができていた。
そのギャラリーの輪の中心では、アウラお嬢様とマリアさんがお互い構えを取ったまま向き合っている。
傍で息を切らし座り込むシャロの話によると、俺が気絶している間にシャロもコテンパンにやられたそうだ。そして、最後はマリアさんの番ということらしい。
一通り話を聞き終わった頃。
二人に動きがあった――最初に動いたのはアウラお嬢様。
ノーガードから放たれる左の一発。それをマリアさんはステップを踏み、するりと後退し回避。
アウラお嬢様の拳は伸びきった状態で、マリアさんの鼻先で止まる。完全に見切った動きにアウラお嬢様が目を見開いた。
突き出された腕を引き戻すと同時に、マリアさんは距離を詰め、流れるように右のストレートを繰り出すも、アウラお嬢様は上体を後ろに倒しスウェーで回避。不安定な体勢のまま、体を跳ね上げ即座に右足のハイキック。
マリアさんは左腕でガードするも、威力を殺すことができずに数歩後ずさり、続けざまにアウラお嬢様が地を蹴り、回し蹴りを放つ。

マリアさんは回し蹴りを下からすくい上げるように上に逸らし、アウラお嬢様の無防備な胴体へと拳を放つも――両手で掴まれ、空中で腕ひしぎ十字固を極められ即座に腕を折られた。
流れるような一瞬の攻防。
俺とシャロだけが知っている。祝福を持つマリアさんに、そんなものは効かないと。折れた腕もすぐに再生を開始するだろう。
現にマリアさんは腕を掴むアウラお嬢様を地面に押さえ付けると、空いている左腕で殴り付けた。
マウント状態でさえ、アウラお嬢様は意に介さず――圧倒的な脚力でマリアさんを押し退ける。
ゆっくり立ち上がったアウラお嬢様は、心底楽しそうな顔をしていた。幼子が初めて壊れない玩具を手にしたような、そんな笑みを浮かべていた。
「フ、フフ……アーッハッハッハッハッハ！」
高笑いをするアウラお嬢様は瞳孔がガン開きで正直怖い。
地面を蹴り上げ、マリアさんとの距離を潰し、拳を振るう。それに応えるようにマリアさんも足を止め、お互いノーガードのまま、その場に釘付けとなる。
周囲で見物している観衆のボルテージも上がっていき、皆が足を踏み鳴らし場を沸かせる。それに負けぬ殴打の応酬。一発殴るごとに、お返しとばかりに一発殴り返す。防御など捨て相手を殴ることだけに力を注いでいる。
それでも圧倒的に有利なのは、回復系の祝福を持つマリアさんだろう。その効果は殴り合いの場において卑怯とも呼べるほどに発揮されていた。

赤い煙を上げながら、殴られたダメージを即座に回復し、万全の状態を保つ。持久戦においてマリアさんに敵う者はいない。そして、アウラお嬢様は蓄積したダメージを回復する術がない。
そんな状況で、先に動いたのはアウラお嬢様だった。
それは一瞬の出来事。
殴打の最中にできた一瞬のタイミング。
アウラお嬢様の拳が、マリアさんの顎先を捉え、その意識を刈り取った――かに思えたが、マリアさんは足を踏み締め耐えた。
すると突然、アウラお嬢様がグローブを投げ捨て、目にも留まらぬ速さで今度こそマリアさんの体を打ち抜く。てっきり、本気の一撃を打つのかとドキリとしたが、マリアさんの体は無事だ。
……ん？　なんだ？
感じたのは小さな違和感。その正体はマリアさんの右腕だ。力なくダランと垂れ下がり、腕が動いていない。
なんだ？　さっきの攻撃で折れたのか？　だとしたら即座に回復するはずだ。俺はそう思った。
次のアウラお嬢様の動きでマリアさんに何をしたのか、その答えがわかった。
アウラお嬢様は、左の肩にも同じような打撃を加えた。いや、打撃と言うには少し違う。よく見ると、指で肩を突いたように見えた。その直後、マリアさんの左腕も力なく垂れ下がる。
――そうか！　肩の関節を外したのか!!
骨折ならば即座に回復する。しかし、脱臼ならば体を傷付けずにすむため、回復が発動しない！

脱臼した時にできた傷は癒えるが、外れた骨が戻ることはない。その可能性を瞬時に見抜き、対応するアウラお嬢様は、確かに［白金］ランクといえる実力者だと実感した。
そうしているうちに、足の関節も外されたマリアさんが地面に崩れ落ちた。
「勝者。アウラお嬢様!!」
俺は声を大にして叫び、マリアさんの回収へと向かった。
ヤバいよヤバいよ。無理矢理終わらせないともっとひどいことになる。はよ連れて帰らねば。
ササッとマリアさんに近づき、お姫様抱っこで自陣へと連れ帰ると、力なく横たわるマリアさんは、申し訳なさそうに――
「すいません。負けてしまいました……」
「……大丈夫ですよ、仇は――俺がとります」
シャロにマリアさんを託し、再び俺はアウラお嬢様のもとへと向かう。

◇

気づくと、目の前でアナとアウラお嬢様の戦闘が繰り広げられていた。あれ、何でだ？
アナは愛用の杖を手にし、アウラお嬢様は黄金に輝く篭手を両手に装備している。
凄まじい攻撃の余波が訓練所を襲う。魔力で作り出された氷と風が激しくぶつかり合い、風で加速した氷の破片が周囲へとばら撒かれるので、周囲で腕を組み余裕の表情で立っていた観戦者たちからは、阿鼻叫喚の嵐が巻き起こっていた。
至る所で守りのスキルや魔法を発動する声があがり、ヒーラーたちの回復魔法の残滓が、辺りを明るく照らしていた。
シャロは盾を構えて俺とマリアさんを守って余裕がなさそうなので、マリアさんに何が起きたのかを問いかけた。
どうやら俺はマリアさんの仇討ちをするため挑んだものの、ワンパンで壁にめり込んだらしい。そして、その瞬間をちょうど訓練所にやってきたアナが目撃。そのまま即座にアウラお嬢様へ襲いかかったようだ。
なるほどねー。何でこんな状況なのか理解した。それにしてもやべーな。［白金］ランクの戦いは凄い。何が凄いって、本来ならば弱い種類の魔法の一発一発が、アホみたいな威力を放っている。どうしよう……さすがに、このまま放っておくわけにはいかない。
俺は意を決してシャロの盾から飛び出し、嵐の中へと駆け出しながら叫ぶ。
「二人ともー!!　ストーップ!!」
俺はめっちゃ頑張った。どれくらい頑張ったかというと。アナとアウラお嬢様の戦いを一人で止めた。
あの嵐のような戦闘に一人で突っ込んでいっただけでも褒めてもらいたい。
だからアナの膝枕で頭を撫でられているのは、名誉の負傷を癒すための報酬でもある。ヒーラー

立ち読みサンプル
はここまで